

## 新羅ガラス器の製作と伝来

兪 炳 夏

訳者 林 志 暎

### 輝くガラスの国、新羅…考古学資料としてのガラス製品

古代世界において新羅は、東西を問わず「物産の豊かな国」として広く認識されていた。日本の歴史書である『日本書紀』や『古事記』、『風土記』には「金銀をはじめ、目が眩むほど珍しい宝物が多い国」と記録され、イスラムの歴史地理書である『創世と歴史』（アル・マクデイシー著）及び『黄金の牧場と宝石の鉱山』（マスウーデー著）にも「新羅は富が多く、地が肥え、貴重な宝石が鉱山や地下鉱脈、河床に多く包含される」と描写されている。一方、『三国史記』には中国唐との貿易を通じて取り引きされた絹・葉剤・高麗人參・金銀製品・皮・漆器など、多くの高級物品について記述がある。

このような記述は七世紀以後の新羅の姿を伝えるものではあるが、七世紀以前においても同様であった。それは考古資料によく現われる。早くから新羅の人々は土器、農機具、武器などと共に、水晶・メノウ・琥珀・ガラスで飾った華麗なネックレス、腕輪を墓の副葬品として残した。慶州市内の大型墓にも、華麗な金・銀製の製品やガラス器、ガラス玉、そしてガラスで飾られた各種の金工品が残さ

れているが、一方で、仏教の舍利具や供養品としてもガラス瓶やガラス玉を多く使用している。

このような様相は三国の中でも、特に新羅にのみはっきりと現われる。そして新羅と同じ時期に栄えた中国や日本、北方民族の多くの国に比べても非常に顕著である。そのため、新羅は各種物産が豊かで、特に光輝くガラス製品が多く、「ガラスの国」と呼んでも良いほどであった。

多様な新羅のガラスは、考古資料としても非常に重要視されている。それは、ガラス製品が、広い地域にわたる古代文化の様相を明らかにするからである。すなわち、ガラス製品は自然から得た原料を素材に、単純な化学的変異を加えた製品に過ぎないが、長い月日を経ても、表面の風化（酸化）以外に化学成分が簡単には変わらない。したがって、これを分析することにより、地域や時期によって異なる方法で製作された幾多のガラス製品の生産地を追跡することができる。さらにまた、それを通じて、複雑なルートを介して成立した古代文化の流れまでもうかがうことができるのである。

## 新羅のガラス器…考古資料の検討

新羅のガラス製品は墓、寺院跡、苑池といった遺構から、各時代にわたり、多くの種類のものが出土している。それらは、下記のような時期区分にしたがってガラス製品の種類と遺構を整理することができる。

Ⅰ期（二～三世紀）…斯盧国が形成され、慶州盆地を中心に発展する時期

Ⅱ期（四～六世紀）…慶州中心の勢力が政治的に安定し、徐々に周辺勢力を服属させ、古代領域国家として新羅が発展する時期

Ⅲ期（七～十世紀）…新羅が三国を統一、東アジアの軸勢力として文化が大きく発展する時期

Ⅰ期は、慶州紗羅里や近隣に位置する浦項玉城里古墳を通してガラス製品の諸側面を窺うことができる。上記の墓では、ガラス玉が被葬者のネックレスや腕輪として副葬されるが、他の遺物に比べ、ガラス製品の占める割合はそれほど高くなく、水晶や琥珀で製作した玉と比べても数量は多くない。

Ⅱ期には、多種多様なガラス製品が大型墓で確認される。特に皇南大塚南墳と北墳・天馬塚・金冠塚・金鈴塚・瑞鳳塚には、ガラス製器と玉が多量に副葬されている。まず、器では把手の付いた瓶「鳳首瓶」をはじめ、杯、脚付コップなどが出土しており、表面には亀甲文・網目文・波状文などが刻まれている。色も華麗で、濃い藍色から軟緑色まで多様であり、一部には透明な表面を輝かせるた

めに、磨きをかけて仕上げたものもある。その他、ガラスで飾られた指輪・腕輪・耳飾・刀・杏葉なども出土している。Ⅰ期と同様、ガラス玉が多量に出土しており、墓の規模に比例して数量の増加する特徴がある。その他にも、少量ではあるが、大型墓から金箔玉・連理文玉<sup>(1)</sup>（雁木玉）・象嵌玉（トシボ玉）が出土しており、種類が非常に多様となったことが分かる。また、陝川玉田古墳のような周辺地域の墓や慶州月城路ga13号墳のように規模が小さい墓からもガラス器と玉が出土しており、慶州仁旺洞・皇南洞・皇吾洞一帯で確認された中小型の墓からもガラス玉が出土している。

Ⅲ期にはガラス器と連理文玉・金箔玉・象嵌玉はほとんどなくなり、それに代わってガラス瓶とガラス玉が多く確認できる。寺院内の塔からは舍利を安置したガラス瓶が、建物周辺からは地鎮祭に使われたり、寺の供養品として使われたガラス玉が出土している。なお、雁鴨池からもガラス器と玉が出土しているが、新羅王室の生活用品であったと思われる。

以上、時期別に新羅のガラス製品を整理してきたが、その中でも特徴的な遺物は、断然、四～六世紀の墓に集中的に副葬されたガラス器である。瓶・杯・碗など、種類も多様であり、三国の中でも新羅でのみこのような様相が顕著に現われるため、非常に特異な現象として注目すべきである。

### 新羅ガラス器を製作した場所…考古資料の科学的分析

新羅のガラス器は、さまざまな方法を利用して生産地の推定が可能である。まず、基本的な方法としては、形態と製作技法を調べ、

既に知られている他地域のガラス資料と比べる方法がある。もう一つの方法は、長い月日を経ても変わらない化学成分を比較し、生産地を推定する方法である。具体的な分析方法は、主に走査電子顕微鏡とエネルギー分散型X線装置(SEM/EDS)・蛍光X線分析(XRF)で、稀に原子吸光分光分析(AAA)や誘導結合プラズマ分光分析(ICP)を用いることもあるが、試料が破壊されるため、現在はほとんど用いられない。このような分析を通じて、通常遺跡から出土するガラス製品は、ソーダガラス(soda glass:  $\text{Na}_2\text{O}\cdot\text{SiO}_2$ )・カリガラス(potash glass:  $\text{K}_2\text{O}\cdot\text{SiO}_2$ )・鉛ガラス(lead glass:  $\text{PbO}\cdot\text{SiO}_2$ )に区分でき、また、微成分によってさらに細分できる。ところで、上記二つの分析方法を使用したとしても、考古学的調査を通じて製作工具や施設といった遺構・遺物を検討することは不可欠である。

何故なら、考古学的調査こそ生産そのものの証拠となるからである。まず、新羅ガラス器の外形の特徴から分析して見よう。これらの形態と、表面に刻まれている文様から見ると、四〜七世紀頃に多く製作されたローマンガラス(Roman glass)やササン朝ペルシアガラス(Sassanian glass)と驚くほどよく似ている。その中でも東部ヨーロッパとイタリア、東部地中海沿岸(エジプト、シリアを含む地域)で作られた鳳首瓶と亀甲文杯、脚付コップ、そして、現在もイラン地域でローマンガラスの伝統を受け継いで作られているササン朝ペルシアの斑點文碗、カットガラス(cut glass、切子ガラス)杯が特に注目される。

上記のガラス器は、製作技法もほとんど同じである。大部分の器は溶かしたガラスをパイプの先につけ、口で吹いて作る吹きガラス技法(blowing method)を用いている。したがって、ガラス器の底に

は吹いた後の二次加工のためにパイプについたガラスの痕跡が共通して残っている。文様は、吹きガラス技法で基本成形した後、表面に溶かしたガラスを糸のように長く伸ばして付けている。また、脚の接着にも溶かしたガラスが用いられ、脚と口縁端部は丸く巻いて成形している。このような製作技法は、ローマ・ササン朝ペルシアのガラスに共通して確認される特徴である。

自然科学的方法で分析した結果も同様である。すなわち、電子顕微鏡分析、分光分析を利用して皇南大塚から出土したガラス器を分析した結果、すべて典型的なソーダガラスであることが判明した。これを今まで蓄積された分析データと比べると、ローマ及びササン朝ペルシアガラスとほぼ同じである。もちろん、新羅の大型墓から出土したガラス器をすべて分析したわけではないが、器の外形や製作技法から見ると同じ系統の物であることを疑う余地はないため、一部に分析対象から抜けた器があるとしても、結論が変わることはないかと判断できる。

一方、韓半島においては、このような器を自主的に生産した痕跡はいまだに確認されていない。六世紀中葉までさかのぼる工房跡が慶州皇南洞で調査されたが、それはソーダガラスではなく、鉛ガラスを生産した施設であることが確認できた。したがって、新羅のガラス器を新羅人が直接製作していないだけでなく、西域から輸入したものを模倣して作った形跡さえ、いまだに考古学的には認められないのである。

## 新羅の大型墓における多量副葬の理由

..考古学資料の脈絡的分析

新羅人が大型墓にガラス器を多量に副葬した理由を知るためには、当時の人々の観念世界が考古資料―副葬品としてのガラス器と墓―とどのように関連しているのかを綿密に調べる必要がある。何故なら、モノである考古資料は、人間の行動により残るもので、その行為を支配するのが観念であるからである。したがって、新羅人の来世観、大型墓を造営した最高支配階層の理念、それに適合する副葬品としてのガラス器の特性といった要素を相互に関連づけ、複合的、あるいは脈絡的に調べることで、大型墓にガラス器が多量に副葬された理由を探ることができる。

大型墓が築造された時期の新羅人は非常に多様な来世観を持っていた。例えば道教、あるいは神仙思想の来世観、仏教の来世観、シヤーマニズム的な来世観が複雑に絡み合っている。このような来世観は、基本的に「精神的な枠組み」であるから、急に新しいものに取り替わることはない。したがって、高句麗の古墳壁画と同様に、新羅の墓においても色々な種類の来世観が同時に表現される場合が多く、例えば慶州の天馬塚では、瑞鳥が描かれた彩画板、蓮花が表現された漆器、天馬が彩色された障泥が出土した。この遺物は、それぞれ上記の三つの来世観を具体的に表現したものと見てよからう。道教や神仙思想の来世観は、長生不死への祈りである。すなわち、人間が一連の修練を磨けば、神仙となり、永遠に死むことのない世界に到達できるという信念である。このような観念に基づいて、雲

母や土製の玉のような物を仙葉や仙丹に擬して副葬し、神仙が乗るといふ瑞鳥を描き、神仙世界への憧れを表すことがおこなわれた。また、仏教の来世観では、副葬品の各部に蓮花を描くことにより、極楽浄土での新しい生を表現する。しかし、上記の二つの来世観は、ガラス器の副葬を直接的に説明するものにはならない。

それを説明するにあたり、より重きを置くべきは、シヤーマニズム的な来世観である。そもそもシヤーマニズム的な世界観のもとで、古代の人々は、人間がいる地上界と絶対的な超越者である神のいる天上界とに宇宙を区分した。そして、神の意思により生活することを最高の善とし、その意思を仲介するシヤーマンを必要とした。そして、時には人々の願いが馬や鳥のような媒体を通じて天に伝達できると信じた。人間の死においては、魂が身体を離れ、遠い所を自由にさまようものと考えられていた。同時に復活に対する具体的な認識もあり、身体を離れた魂が再び身体に戻り、生まれ変わり生き続けるものと考えていた。そのため、墓は魂が戻り―復活して―新しい生が始まる出発点となり、同時に死体は復活を始める準備の基点となる。そして、復活した生が再び生き続けるために、そこにはさまざまな物品を入れておかなければならない。大型墓の物品副葬はこのような脈絡で理解できるだろう。

しかし大型墓の副葬品は、専門の匠人が作った華麗で高級な物品がほとんどで、実生活では使いにくいものであった。「なぜ、こうした華麗な物品の副葬が必要だったのだろうか」。その「説明の枠組み」として、古代社会の最高支配階層が、自分たちの支配理念を効果的に伝える手段として大型墓を選択した点をあげることができる。新羅を含む古代の最高支配階層は、自分たちの政権を維持するため

に様々な努力をした。新羅でも喙部・沙喙部の金氏勢力がさまざまな手段を講じたが、一番先に手をつけたのが武力と経済力であった。しかしこれは相当な費用がかかり、また持続的ではないという短所もあった。より効果的な方法は、最高支配階層の社会的優位を暗に誇示し、民衆の服従心を自然に引き出すことである。そして彼らは自分たちだけの祖先の物語を建国神話に読み替えて広く伝え、国家の大事な祭祀を主催することで独占的な地位を誇示しようとした。

その中で最高支配層やその一族の葬送儀礼も重要な部分を担っていた。例えば、墓を積み上げる過程で、華麗な物品を使った祭祀を何回か―最低4回以上―することで、自分たちだけの優越な地位を葬送儀礼の参列者に誇示することができ、葬送儀礼が終わった後にも同じ理由で定期的に大規模な祭祀を執り行なった。一方、各種祭祀に参加できなかった人々に対しては、慶州市内の平地に大型墓を作り、人々の生活空間の中で常時目に触れさせることで同じ効果を与えることができた。結局、華麗な副葬品は、最高支配層やその一族が欲する支配理念を効果的に伝達する手段であったのである。

こういった目的を果たすためには、できるだけ高級で華麗な物品を多量に副葬することが何より効果的である。当時の新羅人たちが輝く金・銀製の武器や馬具、華麗な絵が描かれた漆器の他にガラス器を選択したのも、このような脈絡で説明できる。

基本的にガラスは単純化合物に過ぎないが、可塑性と再生性がすぐれており、輝き・透明度・綺麗さ・華麗さを特徴とする。そして今日でも芸術品の素材として他の何より柔らかく、優雅で、気品があると評価される。このような特性から、洋の東西を問わず高級物品として選ばれやすく、特に西洋では紀元前三千年頃から現代に至

るまで装身具や日常用品として変わらず製作されてきた。東洋でも紀元前五世紀頃からガラス製玉が西域から流入するようになり、独自の発展を遂げてきたが、西洋と比較できるほどにまでは至らなかった。そのため、西域で生産されたガラス製品の需要が非常に高く、貴重な高級物品として扱われた。例えば、『魏書』には西域のガラス器に関する評価が記録されており、それをみると、ガラス製品は人間ではなく「神が作った物品<sup>(3)</sup>」と考えられていたことがわかる。そのため唐の王室では供物としては最高級の西域ガラス器を法門寺の地宮に献納しており、日本でも宝物中の宝物と見做されていたであろう。古代の様々な物品を伝える正倉院には、西域のガラス器と玉が収められている。

以上のような理由で、新羅の人々も繊細な色や美しい形、輝く光沢を持つガラス器を「驚異の物品」と捉え、西域や唐からの輸入を厭わなかったのであり、最高支配者やその一族に死が訪れた時、威厳を誇示するための手段として大型墓に副葬するようになったのである。

#### 遠き新羅へ―遙かなるガラスの道―考古学的仮説の検証

新羅のガラス器のうち、かなりの部分にははるか遠い西域から持ち込まれたものと推測されるが、これを立証するには、長い歴史と文化的背景を持つ古代人の利用した交通路の存在を前提に、その交通路上に位置する地域で同じ種類のガラス器が考古学的調査によって確認されなければならない。

古代の交通路は、よくシルクロード (Silk road) と呼ばれる。この

道は通常、中央アジアや中国北東部の砂漠地帯を通って中国に至る道として知られているが、実際は中央アジア北部の草原地帯を貫く道と南アジアの海を横断する道を全て含んだ概念である。空間的範囲としては、ヨーロッパや東部アフリカ、そして遠く韓半島から日本列島までを包括している。

まず、オアシス路 (Oasis road) は中国の長安 (西安) を出発し、タクラマカン砂漠周辺の北道と南道を経由してバミール高原を越え、南ロシアとイランを経てトルコに至る道である。既に紀元前五世紀頃から文献記録にその存在が知られており、中国の後漢・南北朝・隋・唐に至るまで絹をはじめとする物品の交易が活発だった場所である。新羅と日本の場合、唐を介してこのルートに繋がっていた。

草原路 (Stepperoad) はユーラシア大陸の北緯四十〜五十度に位置する草原地帯を貫いて東・西洋の文物が行き交った道である。すなわち、バルト海と黒海、カスピ海沿岸とカザフスタン、アルタイ山脈以南のジュンガリア盆地、モンゴルゴビ砂漠の北部、中国東北方を相互に繋ぐ道である。この道を通じて既に紀元前七世紀頃からスキタイ人が東方交易を開始、紀元後四世紀頃には匈奴「訓 匈奴」が西進し、ローマを圧迫した。新羅と日本は、中国東北方に位置する王朝 (前燕、北燕、後燕など) や高句麗を通じてこのルートに接することができた。

一方、南海路 (Sea road) はアフリカ東部沿岸とペルシア湾一帯、スリランカを含むインド沿岸、ミャンマー、スマトラ、ベトナムと中国の南部地域を繋ぐ道である。既に、紀元前七〜六世紀頃から進出した各種海上活動が、ギリシャとイスラムの文献に残っており、紀元後一世紀頃の北インドの状況が描写されている『法華経』には、

南アジア沿岸で、ガラス、亀甲といった高級物品が取り引きされた記録が残っている。中国では、秦始皇帝の南海貿易と後漢代の大ローマ (Romé) 交易がまさにこの道を通じて行われた。新羅と日本は南シナ海を横断する航路を利用して中国南部の広州に渡り、南海路と繋がることのできた。

以上のように、文明の交差点には、各種のガラス器が東に伝わったことを推測させる痕跡が数多く残っている。ところが、ユーラシア大陸全体とインド洋、南シナ海を含む広大な地域を考古学的に検討するには、資料があまりに少ない。特に上記の地域の大部分では、考古学が学問として十分には発展していないという事情もある。しかし、現在ある資料だけでも、ガラス器が東に伝わったという傾向を考古学的に証明するのはさほど困難ではない。

まず、ガラス器を上記の道にプロットして経路を推定してみると、次のようになる。鳳首瓶と亀甲文杯はヨーロッパから、シリアとイランを経て韓半島 (皇南大塚、天馬塚) まで伝来した。網目文杯もやはり東部ヨーロッパを出発し、シリア、南ロシアを経て中国の北部 (河北省封氏墓) から韓半島 (瑞鳳塚、皇南大塚) まで伝わった。斑點文碗は、シリアとイランで盛んに生産されたものが韓半島 (金鈴塚、陝川玉田) まで伝わった。カットガラス杯はヨーロッパから出発し、ササン朝ペルシアを経て中国の中部 (南京仙鶴冠M6号墓) と北部 (北票県馮素弗墓、湖北省五里墩墓) をともに経由し、韓半島 (皇南大塚) 及び日本列島 (新沢千塚、伝安閑天皇陵) まで伝わった。その中でも円形突起を持つカットガラス杯はイラン地域で隆盛し、中国の北部 (寧夏李賢墓、北京八宝山墓) から日本列島 (沖ノ島祭祀遺跡) まで伝わった。また、藍色のガラス杯もヨーロッパを出発してシリア地域を

経た後、中国の南部（広西省紅頭嶺墓）と北部地域（河北省華塔）を経て韓半島（慶州安溪里、皇南大塚、瑞鳳塚）まで伝わった。一方、鳥形ガラス器もやはり上記のような経路で中国の北部まで伝わった。以上のことから、考古学的調査が不十分な南ロシアと中央アジア、南アジアの事情を勘案しても、草原路・オアシス路・南海路を複合的に利用して多種のガラス器が中国と韓半島、そして日本列島まで伝わったことが分かる。

最後に、統一新羅時代にガラス玉と共に出土するガラス瓶について述べておく。文明史からみて、統一新羅のガラス瓶はローマやササン朝ペルシアの小型瓶がそのまま伝わったものとみることのできる。しかし七世紀以降、一般的なガラス文化が東に伝わる過程で中国大陸と韓半島、日本列島が仏教を背景に独特のガラス瓶文化を形成したと見る方が正しいと思われる。上記の三つの地域では同じ種類のガラス瓶を舍利具として製作しており、すべて自前の生産基盤をそなえていた。その中でも注目すべきは、日本の鉛ガラス系統の瓶である。当時の日本は新羅からガラスの製作技術を含む先進文明を積極的に受け入れており、鉛ガラスで製作した瓶も残っている。<sup>4)</sup>

### 新羅のガラスが意味するもの

…考古資料を通じた古代文化の解釈と復元

新羅のガラス器は、多様な遺跡からさまざまな性格のものが出土するが、多岐にわたり進めてきた考古資料の検討と科学的・脈絡的分析、提起しうる仮説に対する検証を通じて、新羅を中心とする古代文化の大きな流れを復元するのに非常に有用な資料であることが

立証できた。もちろん、新羅の金工品、馬具、武器もこのような資料の範疇に入るが、空間的に検討可能な範囲がガラス製品に比べ限られており、現時点ではそれ以上に効果の高い資料を求めるのは難しい。

新羅のガラス器を通してみると、少なくとも新羅が文明史から除外された辺境の小国ではなかったことがわかる。むしろ東西洋を包括する大きな流れに能動的に参加し、外からの多様な文物を受け入れながら、自らの手により開放的で国際的な文化を発展させた。新羅は、紀元前七〜六世紀頃からその存在が知られるオアシス路・草原路・南海路などを通じて直接西域の物産を受け入れる一方、西域のガラス器文化が東に伝わる過程で北方民族の多くの国や中国王朝において変容し発展した独特のガラス器文化を受け入れた。また、中国や日本と共に東北アジアの特色あるガラス器文化を構築した。このような過程で、新羅は独自の生産技術を確立し、華麗なガラス玉とガラス飾り、ガラス瓶を作りシルクロードの最極端に位置する日本にその技術と製品を積極的に伝えた。

このような成果をもたらしているにもかかわらず、新羅のガラス器は相変わらず考古学的に乗り越えなければならない多くの課題を抱えている。まず、国内的には、ガラス器の製作技法に関する綿密な観察と実験的復元を先行させる必要がある。同時に、対外的には、中国と南ロシア、南アジア一帯のガラス器に関する資料を収集すると共に、新羅資料との精緻な比較分析をおこなう必要がある。このような課題が遂行された時にはじめて、新羅のガラス器は時空を越えて、新羅人の息吹を生き生きと我々に伝えるであろう。

【注】

- (1) 連理文は、「王者の徳によって豊かな水分を与えることができれば、根の異なる木が互いに合わさり、一つの木に育つ」という古代中国の樹木信仰に由来するもの。玉の文様が、木が合わさって拗じれながら育つ模様と似ていることから、この名が付けられた。
- (2) 今まで発掘によって確認できた新羅のガラス器は、総数二十五点程度に過ぎないが、未発掘の古墳が無数にあることを勘案すると、その数は大幅に増加する可能性がある。これに比べ、考古学的調査が多くなされた百済・高句麗・伽耶の墓では、いまだにガラス器が出土していない。一部の学者は、高句麗安岳3号墳の壁画に描かれた器をガラス器とするが、筆者の観察では信頼し難い。
- (3) 原文に「神而所作」とある。
- (4) 日本のガラス瓶の素材となる鉛ガラスは、百済地域（益山王宮里・弥勒寺址）から流入したものと既に立証されている。また、慶州皇南洞ガラス工房跡で生産されたガラスも、やはり化学組成が類似する鉛ガラス系統である。

(Yoo Byung-ha / 韓国国立春川博物館館長)

(Lim Ji-young / 奈良大学大学院博士後期課程単位取得満期退学)